

東京家政大 神野 節子
○土屋 則子

1. 皮革製品の防黴に関しては、海外ならびにわが国にも数種の報告があるが、その後の防黴剤の発展により、数多くのもものが市販されているが、皮革へのそれらの効果、実用性などが仕上法との関連において検討されていない。また、日本工業規格に、皮防黴法に関するものがあるが、試験菌の選定や試験方法が実用性とは多少離れているように思われるので、それらの問題点解明のために実験を行なった。

2. 試料皮革は成牛甲皮(クロムなめし中和直後の甲皮)を用い、試験菌は J. I. S. 菌と皮からの分離菌を選定。防黴剤は有機銅化合物他。加工法は浸漬法と表面噴霧法を仕上げの段階と関連して実施。防黴試験法は J. I. S. 法と水寒天法その他を採用して、効果の判定を行なった。

3. ① 各種防黴剤の皮革防黴効果をもたらせる濃度を求め得た。

② 処理加工段階により、防黴効果の差異が若干認められた。

③ 試験菌は皮からの分離菌を使用する方が抵抗性があった。

④ 防黴試験法としては、J. I. S. 法よりは水寒天法、あるいは湿式法の方が実用性があると思われた。